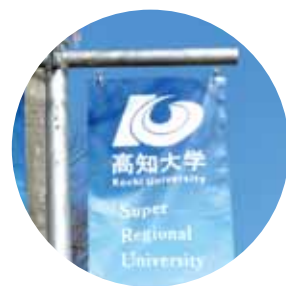


第2回

KOCHI 未来会議

「課題先進地」から
「課題解決先進地」へ、
高知がその先頭を走るために
議論を尽くそう。



2025年

11月22日^土、23日^日

会場 高知大学朝倉キャンパス

パネルディスカッション、
リレートーク、ビデオトーク
総勢70名による議論が行われました。

KOCHI未来会議のこれからに向けて

国立大学法人 高知大学

受田 浩之 学長

Kochi Future Conference
KOCHI
未来会議



課題先進地から課題解決先進地へ、 地域に存在する私たち国立大学法人の使命に。

第2回KOCHI未来会議の開催にあたり、主催者を代表して心より御礼を申し上げます。はじめに、本会議の目的と今後の展望についてお話しいたします。

高知県は人口減少に苦しむ「課題先進地」ですが、その課題を解決に導く上で、必要な知識(knowledge)を集め、高知のみならず地域ごとの独自性を尊重し、想像力、独創力を駆使しながら、人が織りなす共感や人間味、ヒューマニティを基軸にした、イノベティブ(斬新・革命的)な議論を未来に向けて展開していきたいと思い、この会議の設置目的に掲げています。これを俯瞰で見れば、高知の未来は、日本、ひいては世界の未来の姿でもあります。私たち国立大学法人は、この「課題先進地」を「課題解決先進地」へと変貌させ、世界に先駆けて解決策を提示していく。そのような想いを持っています。

生物の細胞における「内と外」の関係を、自治体(地域)の内外になぞらえて考えてみると、細胞が外部から物質を取り込み、内部で代謝して放出するプロセスは、地域のあり方を考える上で大きなヒ

ントになります。外部のものを取り込むには、まず「親和性」が必要です。外の要素を一度「小胞体」のような組織に取り込み、内部のものと掛け合わせる内外一元化して変化したものが、再び外へと出ていくというスキームです。よく自治体では人口流出を防ぐための囲い込みが行われますが、それでは外部からの取り込みまで阻害してしまいかねません。親和性のあるものを受け入れ、必要でないものは排出する。こうした代謝系のような循環を設計することこそが、自治体やコミュニティの持続可能性につながるのではないのでしょうか。

私たちは、自らが持つ知識や人材と

いった経営資源を最大限に活用し、多くの皆さまにお力添えをいただきながら、シナジーを生み出す交流拠点を目指しています。その実践の場として、昨年「KOCHI未来会議」を立ち上げました。この会議を通じて、講師陣が持つ学外の知見や情報を大学内へと取り込み、内外を隔てなく融合させることで、活発な議論のもと組織をアップデートしていく取り組みになればと考えています。

この2日間、皆さまと共に深める議論が、高知、ひいては日本や世界のより良い未来へとつながることを心より期待しています。



東京海上日動火災保険株式会社 相談役

永野 毅^{つよし}さん



「3つの開放」の議論を通じて 日本の未来をリードする先進県に。

皆さんこんにちは。永野毅と申します。第2回KOCHI未来会議の開催、心よりお祝い申し上げます。

将来、世界が直面すると予測される多くの社会課題を、日本はすでに抱えています。人口減少や、自然災害の激甚化・頻発化などがその代表例ですが、中でも高知県は、こうした課題が全国に先駆けて顕在化している「課題先進地域」であると言えるでしょう。私は、こうした現実から目を背けず、社会の在り方と価値観を時代に合わせて大胆に変革しなければ、人々の暮らしも、国土も、そして何より大切な文化も守り抜くことはできないという強い危機感を抱いています。今こそ、課題先進県である高知を筆頭にして、国民全員が日本の将来のあるべき姿を根本から見つめ直す時ではないでしょうか。

これまで機能してきた人口増加時代の社会構造は、今や機能不全に陥っていると考えます。人口増加局面においては、経済成長という目標を達成するために、トップダウンや中央集権といった「人をコントロールしやすい効率的な仕組み」が採用

され、人間を社会のルールや制度に融合させてきました。しかし人口減少へと転じるこれからの時代には、大きなパラダイムシフトが必要です。

今後は現場や地域からのボトムアップを重視して、人や地域の個性、創造性、多様性といった、潜在的な可能性にフォーカスし、その魅力を最大限に引き出す仕組みへと転換しなければなりません。それによって一人ひとりの生きがいや、やりがいを高めて、結果として経済成長につながっていく。そのような新しいサイクルを回していくことが重要です。

そこで私は、高知が日本をリードしていくための改革の方向性として、大きく3つの開放を提案したいと思います。第1に「高知の土地の開放」です。土地のあり方を所有から利用へ転換し、その多様性や可能性を最大限に活かして経済の活性化を促すことが重要です。あわせて分散と集中のベストミックスを追求し、災害や危機に強い国土構造へと転換を図る。こうした取り組みで全国をリードしてほしいです。

第2に「高知の人の開放」です。これは

県民が持つ潜在能力を最大限に発揮できる社会づくりのことで、高知には地域を支える有為な人材が数多くいます。こうした方々が首都圏や関西圏へ流出することなく、地域に留まり活躍できる環境を整えることが不可欠です。

そして最後の3つ目は、「高知の魅力の開放」です。高知が誇る文化、風習、歴史、自然、食、唯一無二の産業。これらを一つのストーリーとして戦略的に発信していくべきです。全国の若者にとって魅力的な地域になることで、県外からの大きな人の流れを生み出します。それと同時に、先ほど述べた地域の有為な人材を引き留めることにもつながります。

最後になりますが、ぜひこのKOCHI未来会議を通じて、私が申し上げた「3つの開放」について皆さまで大いに論議していただきたいと思います。ここでの議論が市や県、さらには国を巻き込んだ高知発の国民運動へと展開する第一歩となり、高知が日本の未来をリードする先進県になることを、県出身の一人として心から願っています。

基調講演

「持続可能社会のデザイン —『デジタルの先』の未来と地域—」

京都大学名誉教授 広井 良典さん

人口減少社会は危機ではあるけれど、
大きなチャンスでもある。

ご紹介いただきました広井です。本日は貴重な機会をいただき光栄です。私は科学哲学という文理融合の分野から社会課題の研究に携わっており、本日は「持続可能な社会デザイン」と「デジタルの先の未来と地域」をテーマにお話します。

まず日本の人口推移を長期視点で捉えます。江戸時代後半は約3,000万人で安定していましたが、明治維新以降から急増し、経済も大きくなっていき、2008年にピークを迎えました。2011年からは完全な人口減少社会に入り、2024年の出生率は1.15。2100年には6,300万人にまで減少すると予測されています。確かに人口減少社会は大きな課題ですが、私はこれは危機であると同時にチャンスだと捉えています。これまでの延長上にはない新しい発想で物事に取り組めば、むしろプラスの可能性が開けるはずで、極めてチャレンジングな時代を迎えようとしています。

人口増加時代は物質的に豊かでしたが、相当な無理もあったといえます。では、真の豊かさをどう捉えますか。GDP（国内総生産）では測れない幸福について、日本では地域が先導してきました。例えば東京の荒川区は2005年からブータンのGNHに倣い「荒川区民総幸福度（GAH）」を提唱。46項の指標で調査を行い、政策へ反映させています。荒川区が重視したのは「子どもの貧困解消」です。この理念に共鳴した約60の自治体が「幸せリーグ（住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合）」を結成し、同様の



施策を展開しています。高知でも「グロス高知ハピネス（GKH）」があり、土佐経済同友会での講演を通じ、その取り組みに触れる機会がありました。

これを客観的に見れば、先進国G7の経済成長は停滞し、いわゆる成長から成熟経済へと移行しています。これは決して嘆かわしいことではありません。物質的豊かさという目標を概ね達成し、次のフェーズへ進むサインといえます。今こそ高知から、新たな幸福やウェルビーイング、豊かさのビジョンを提示することが重要ではないでしょうか。

未来は都市集中型か、 地方分散型か。どちらを選ぶ。

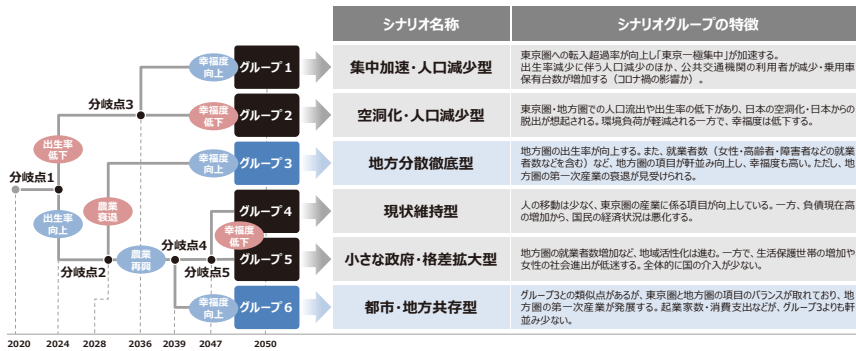
現在、首都圏では高齢化が急激に進行しています。2010年から2040年の30年間で、東京都の高齢者は144万人増加する見込みです。これは滋賀県や岩手県の総人口を上回る規模であり、まさに高齢化の一極集中が進んでいきます。その背景には、高度成長期に流入した団塊世代の高齢化があります。こうした事態を受け、2016年に日立・京大ラボが設立さ

れ、2050年に向けた日本の持続可能性に関する共同研究が始まりました。

持続可能性を「人口」「財政・社会保障」「地域」「環境・資源」の4カテゴリーに分けて研究し、また、持続可能性になるためには何が重要かという点も考慮しました。その結果、日本社会の未来は「都市集中型」か「地方分散型」かが最大の分岐点であることが分かりました。AIのシミュレーションが出した結論は、人口維持や地域の持続性、健康格差の観点から「地方分散型」が望ましいというものです。2万通りの未来を6グループに分類したところ、都市集中シナリオでは地方が衰退し、全国で一番出生率が低い東京に人口が偏ることで、日本全体の人口減少が加速します。財政的には東京の一人勝ちに見えますが、中長期的には人口減少も加速していくので、決して望ましいシナリオとはいえず持続困難です。対する地方分散シナリオは、人口が分散して出生率が持ち直し、格差も縮小しますが、現実にしていくためには、さまざまな政策的な対応が不可欠だという内容でした。

また東京と地方といった空間的な意味

シミュレーション結果：分岐図と各シナリオグループの特徴



総評

- シナリオを構成する個別指標を詳細に確認したところ、6つのシナリオグループは上記のような特徴を持つことが判明した。
 - その中でも、前ページでも注目した「グループ3」と「グループ6」が全体的にパフォーマンスの高いシナリオである。
- ⇒ 望ましいシナリオグループ

だけでなく、男女の役割分担や働き方、生き方まで含めた「包括的な分散型社会」が重要であることも判明しました。多様性のある地域分散成熟シナリオこそが、日本社会のパフォーマンスを高めるという結果です。

次代のキーワードは「生命」、高知県との親和性も非常に大きい。

ローカリゼーションとデジタルの先の未来について話します。岐阜県と福井県との県境にある石徹白地区は、かつて限界集落寸前でした。しかし十数年前、U・Iターン組の若手を中心に、小水力発電や木質バイオマスなど自然エネルギーによる地域おこしが始まります。これが成功して、現在は電力を自給し域外へも供給しています。中心人物が平野彰秀さんで、元外資系コンサルタントです。資源争奪の現場を経験した彼は、食料とエネルギーのローカルな自給こそがグローバルな課題を解決し、地域の自治やコミュニティの力を取り戻すことだと信じ、この事業を推進したということです。

農業は基本的にローカルですね。これが工業化でナショナルに、情報化になると国境を越えて人・モノ・金が移動しますからまさにグローバルへと拡大しました。科学の基本コンセプトが物質、エネルギー、情報から「生命」へ移る今、デジタルの先にある「生命」が次代のキーワードになるでしょう。

経済面では生命経済・生命関連産業があり、健康や医療、環境、子育て支援を含めた生活福祉、生命の根源となる農林水産業が重要視されます。文化活動も生命維持に不可欠な要素です。こうした分野は小規模なローカル環境でも展開可能なため、高知県との親和性も非常に大きいと考えています。

森林減少によりウイルスを保有する動物が人里へ現れ、人間に感染すると最近の研究があります。私は環境省の生物多様性国家戦略委員会で議論に参加していますが、現在は自然を再評価する「ネイチャーポジティブ」の動きが活発です。県土の84%が森林の高知県にとって、自然資本の重要性が改めて浮き彫りになっています。これに関連し、私が推進してきた「鎮守の森コミュニティプロジェク

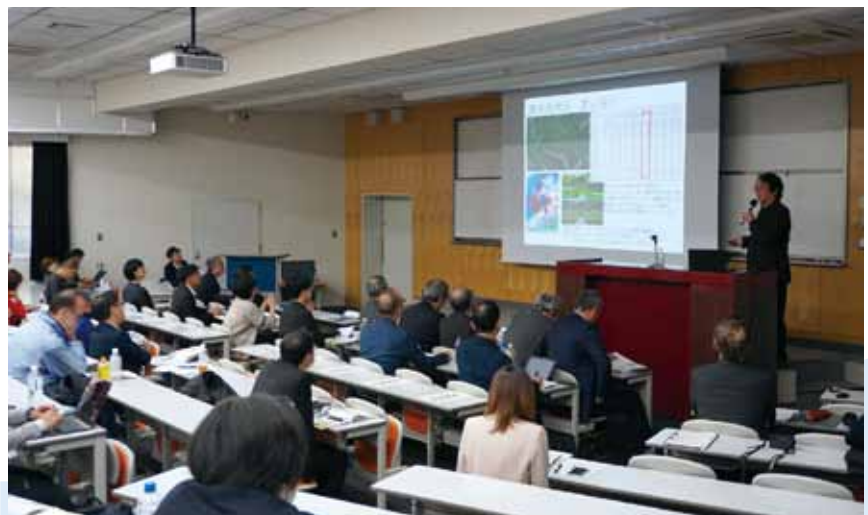
ト」を紹介してまとめとします。日本には神社とお寺がそれぞれ約8万ヶ所あり、コンビニの約6万店舗を上回ります。この鎮守の森を現代の課題解決に活かす試みです。神社は明治初期には20万ヶ所あったと言われ、豊かな生物多様性の象徴でもあります。八百万の神に代表される「自然との共生」という価値観を大切にしながら、地域文化に根ざした生物多様性の保全につなげていくことを目指しています。

今日は人口減少の話の皮切りに、GKHが象徴する新時代の幸福ビジョン、自然資本やネイチャーポジティブ、鎮守の森、そして生命経済を軸としたデジタルの先の未来について提起しました。外からの勝手な視点ですが、私からの話題提供が何かの参考になれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。



プロフィール

1961（昭和36）年岡山県岡山市生まれ。東京大学教養学部を卒業、同大学院修士課程修了後、厚生労働省に1996年まで勤務。その後2016年まで千葉大学教授。この間、2001年から2002年にマサチューセッツ工科大学にて客員研究員を務める。2025年まで京都大学教授。現在は京都大学名誉教授。



意見交換会 ― 広井先生を囲んで ―

基調講演を行った広井良典さんを中心に、3名のパネリスト(柳原直人さん、玉木伸之さん、受田浩之さん)が、会場からの質問を交えて多角的な議論を展開しました。AI技術からインフラ、分散型社会など、高知県の未来を見据えた幅広いトピックに及んだ当日の激論の一部を抜粋してご紹介します。

(司会) 会場から皆さんに質問です。集中型から分散型へと日本のあり方を変えていく際、国として重点的に取り組むべき事業は何だと考えますか。まずは学長からお願いします。

受田 「モデルとして浮かんだのは広井先生がおっしゃったドイツのイメージです。現在、日本には自治体が1,741の市区町村(東京23区を含む)あり、そのすべてがフルセットで行政機能を維持しようとするのは、現実的に無理があります。それを多極分散型、あるいは拠点(コア)と周辺(スポーク)をつなぐモデルを構築することで、フルセットからの脱却という共通認識が必要です。

その過程で懸念されるのは自治体間での足の引っ張り合い、不毛な競争です。そうではなくて、ある地域は工業地帯、この地域は商業地、あるいはフランクフルトのように金融都市というように、それぞれの役割を明確にした上で、各地域が自らの強みを最大化し、ネットワークを通じて国富を高めていく。時には互いに譲り合い、役割を全うする形こそがあるべき姿ではないかと考えています。」

広井 「私は地方都市の再生・活性化が戦略的に極めて重要だと考えます。分散型社会を実現するには、その受け皿となる地方都市が拠点として機能していかなければなりません。高知市にはそのポテンシャルがありますが、県全体で見ればさらに多極化できる可能性があります。

もう1つは、日本の持続可能性にとって重要なテーマは若い世代への支援です。例えば現在の日本は年金に約55兆円が投じられる一方で、文科省の教育予算は約4兆円。資源の多くが高齢層に分配されています。若い世代に十分資源・お金



が回る仕組みをつくることは、分散型社会の構築とセットで考えていくべきです。」

次の世代への支援が不可欠。

玉木 「広井先生の二点目のお話に重なりますが、やはり『次世代をどう支えるか』が鍵となります。私たちが現在享受している安全で豊かな暮らしは、前の世代、あるいは過去の世代が築いたインフラの上に成り立っています。ローマン・クルツナリックの著書『グッドアンセスター』には、『あなたは後の7世代にとって良き先祖になれるか?』という問いがあります。そういった意味で言うと、パラダイムが変化する中で、次の世代にどのような支援ができるのか。世代間で哲学的な要素も取り込みながら対話を重ね、制度設計に反映させていく必要があると感じています。」

柳原 「あえて月並みですが、インバウンドも含めて観光を分散のキードライバーにすることを提案します。私は京都に長く住んでいたのですが、外国人の多さを実感してきましたが、今はSNSを通じて全国各地でその姿を見かけます。日本にはアニミズム的な要素も含め、観光の財源・アセットが非常に豊富です。

ただ地方同士が外国人観光客を取り合っている現状は問題です。例えば『すごろく』のように、全国を巡ることで観光の価値が最大化する仕組みや、地域の魅力を綴った『巻物』を広げていくような日本独自の歩き方など、地方が連携しながら切磋琢磨できるモデルが理想的です。

また、旅行者への対応も必ずしも英語である必要はありません。土地の言葉で語り、それを理解してもらうこと自体に価値があるからです。こうした取り組みは、結果として地域の人材育成や教育にもつながるはずです。」

極を重層的につくってネットワークする。

(司会) 続いて広井先生への質問です。「多極集中」という言葉がよく出てきますが、具体的に日本国内にいくつほどの極ができるのでしょうか。例えば2050年の四国を想定した場合、どの程度の数の「極」をイメージされていますか?

広井 「非常に重要なご質問です。私はあえて理屈っぽく『重層的多極集中』と呼んでいます。この重層的といっても難しい話ではなく、100万人規模の大都市から、



司会を担当した高知大学の
堀見和道理事



基調講演をした京都大学
名誉教授 広井良典さん



玉木アンドアソシエイツ株式会社
代表取締役 玉木伸之さん



株式会社たすぎづな
代表取締役 柳原直人さん



高知大学の受田浩之学長

数十万、数万、あるいは数千人規模のものまで、大小さまざまな極が異なる機能を持って存在している状態のことです。当然100万都市と5万都市では産業構造も役割も異なります。しかし、それらが性格の異なる極として重層的に積み重なり、ネットワークを形成していることが重要です。

これはドイツの都市構造に近いイメージですが、都市は10万人から20万人規模が一つの指標となりますが、かなり小規模の都市でも極になり得ると考えています。例えば、商店街が成り立つには10万人程度の規模が必要ですが、極のあり方は商店街だけではありません。高知県佐川町のように『道の駅』と『おもちゃ美術館』を組み合わせることで、一つの極をつくることも可能です。」

(司会) いろいろな大きさの極が多層に重なり合って、つながっているというイメージですね。ここからは「デジタル・AIの先にある生命経済、生命関連産業」について伺います。高知としても生命関連産業は一つの捉えどころです。まず柳原さん。高知の今後の可能性やヒントについて伺えますか。

柳原「ライフサイエンスやヘルスケア、メディカルなど、人間の健康に直接ソリューションを出すやり方もありますが、一方で『持続可能な地域づくり』というアプローチもあります。

前者はAIが発達しても、時間とお金がかかります。一方で、高知は南海トラフ地震などの自然災害に対しては非常にセンシティブな県です。高知の素晴らしい点はレジリエンスに対して、三陸とは異なる独自の考え方を持っていること。単に防波堤を築くだけでなく、起きたら仕方ないという受容や、沈下橋のように増水しても流されない、例え流されても架け替えやすい知恵を持っています。こうした過去の知

恵と最先端技術を組み合わせれば、防災・減災のソリューションを産業化できるポテンシャルがあるはず。またコミュニティのつながりが深いほど災害からの復興は早く、防災・減災は高知の産業の一つの形になり得ると考えています。」

(司会) 玉木さんは、生命関連産業における高知の可能性をどうお考えですか。

玉木「人間社会のサステナビリティを考えた時、生命産業は国が最優先に支え、投資する分野です。単にお金を持てば豊かになるという社会から、お金が社会の血流として循環し、全員を豊かにするような形へ移行すべきでしょう。

高知は厳しい自然にありますが、それに抗わず、自然の恵みを享受しながら生きていますよね。循環型モデルを構築する上で、高知はちょうど良い規模感です。人口減少や若者不足もポジティブに捉えれば、小さなエリアで課題解決に挑戦することで、外部からの支援や『高知でこれを実現したい』という人を呼び込むきっかけになります。そのためにも高知の良さや挑戦をもっと発信していくことが重要だと思っています。」

「生命」こそデジタルの先の産業になる。

(司会) 広井先生、高知に期待を込めてメッセージをお願いします。

広井「今日のサブタイトル、『デジタルの先に生命がある』という方向性は間違いありません。物質・エネルギー・情報まではグローバル化の流れでしたが、情報から生命への転換は質的に異なります。現代はデジタルが重要視されていますが、実際には外資系プラットフォーム企業が利益を上げています。『デジタル田園都市』で一番儲かったのは、東京にいる外資系デジタル企業で、地方は本当にそれで恩

恵を得ているのか?と思います。

だから結局、アメリカ、東京、地方というヒエラルキーが、デジタルの流れだとそのまま維持されますが、生命はローカル主導で状況を変えられる局面です。生命関連産業の具体的な展開は皆さんに考えていただきたいですが、ヘルスケアと環境、生活福祉と農林水産、もちろんこれは受田学長の食品もありますし、それから文化。このどれもが高知において大きな展開の余地があると思っています。」

(司会) 広井先生、ありがとうございます。5つの面は高知大学にとっても肝となる部分です。最後に学長、会場の皆さんにメッセージをお願いします。

受田「『生命にこそデジタルの先の目指すべきものがある』というお話は、我々にとって大きな励みになります。生命を育む農林水産には、太陽、水、空気、土壌といった自然の要素が不可欠です。これらは東京などの大都市では決して真似できない競争優位性があり、地域だからこそ挑戦する価値がある産業です。

また、担い手である『人』についても重要です。高知の人口減少は深刻で、現在は65万人を切っていますが、2060年には39万人になると予測されています。労働生産性を徹底的に高めなければならない、ある意味世界で最も過酷かつハードルの高い地域です。しかし、このハードルを乗り越えることは、日本のみならず世界の課題解決につながります。高い目標を掲げつつ、一人ひとりの価値を最大化し、ヘルスケアや健康増進を大切に。本学は人文社会、教育、農林水産、地域協働、医学、理工学の全6学部を有しています。これらを総動員して、この課題に挑戦していきたいと思っています。」

(司会) 広井先生をはじめ、パネリストの皆様、ありがとうございました。

2つの報告会



県内のグローバルニッチトップ企業の動きや本山町はどう変わっていくのか。
その鼓動を体感する報告会をお届けします。

1

GNT 企業研究会活動報告

研究会座長 的場 竜一さん
(高知大学人文社会科学部 准教授)

新分野への進出、技術革新など
成長を目指す研究会

課題先進地域である高知において、企業が生き残っていくためにはどうすればいいのか。その問いに対し、当研究会は「KOCHI未来会議」の分科会として、グローバルニッチトップ企業(GNT)の創出を目指し設立されました。設立から1年、対面形式による工場見学などワークショップと、オンラインセミナーを組み合わせたハイブリッド型で、月1回ほどのペースで活動を続けてきました。

これまでの活動を通じ、厳しい地政学的条件の中でも、独自のニッチ市場戦略をとっている県内企業が数多く見受けられました。また、グローバル化に伴う人材確保や環境変化への備えとして、外国人技能実習生を積極的に雇用している企業も少なくありません。

これからの課題は、規模の大きなGNT企業から中小企業ま



で、それぞれの「ものづくり能力」「組織能力」「マーケティング能力」が現在どの段階にあるのかを明確に見極めていくことです。研究会については、着地点が見えにくいというご指摘もあります。特に、活動に対するフィードバック体制の構築は、参加者のモチベーション維持に不可欠です。今後は、参加企業の皆さまからの改善提案を柔軟に取り入れる仕組みづくりについて、議論を深めていきます。

本研究会は月に1回の頻度で開催しています。右記のQRコードから登録が可能ですので、ぜひお気軽にご参加ください。



2

高知県本山町における活動報告

梶 英樹さん (高知大学次世代地域創造センター
地域コーディネーター (嶺北地域))

大学がプログラムの開発・運営・実装化までを担い、
そのノウハウを町へ移譲する新たなシステム。

人口が約3,000人、高齢化率約45%。多くの限界集落を抱える四国の中央部に位置するのが本山町です。ただ、町内でも特に中心地での人口減少が激しく、この「まちなか」をいかに活性化させるのが長年の課題でした。私はこれまで約10年間この地域と関り続けてきました。意欲ある地域の皆さんと活性化に向けた意見交換を重ねてきましたが、資金や人材不足など最終的には行政に頼らざるを得ない場面が多く、財政難や職員の負担に直面する町としても新しい試みに充分対応しきれないという現実がありました。

そこで、大学自らが行動し、新たなリソースを拡大させていこうと、2024年に町と連携協定を締結しました。その施策の一つが、ふるさと納税の財源を活用し、住民活動を創発するための助成プログラムです。最大の特徴は、町から委託を受けた大学がプロ



グラムを開発・運営・実装化までを担い、将来的にそのノウハウすべてを町に委譲する仕組みにあります。またすべての事業において高知大学生が関わることも大きなポイントです。

さらに新たな領域として「地域の国際化・多文化共生の推進」への展開も進めています。例えば大学に留学しているJICA研修生が小学校での国際理解講座や、地元にある国際性の再発見・共有など、世界と本山町のつながりから地域を活性化させるアプローチを展開しています。今後はその活動を核とする、一般社団法人を設立し、さらなる事業展開をしていく予定です。

ズリレ→トークズ

独自の視点で未来を切り拓く若者たちによる、
熱意のこもったリレートークになりました。



人間が生き生きとしている
世界を目指して。
京都大学総合人間学部2年生
石崎悠也さん

中学以来、核のごみ問題に向き合い、「なぜ人は社会課題を自分ごと化できないのか」を探究してきました。対話を通じて“自分ごと”を広げ、さらに“私たちごと”へと昇華させる「Ours化構想」を考案しました。現在は①核のごみ問題の再考、②筋トレ経験から関心を深めた身体性と哲学、③非日常を創るサークル活動の三つを軸に活動しています。これらを統合した結果、私は「人間が人間らしく、生き生きと過ごせる世界」を構想しているのだと気づきました。



人とコンピューターが
より一体化する未来へ。
Diver-X株式会社 Co-Founder
浅野啓さん



コロンビア大学を卒業後、高校卒業時に自ら設立した「Diver-X(ダイバーエックス)」に戻り、現在は東京を拠点に活動しています。人と技術をつなぐ新しいインターフェースの開発に取り組み、従来の枠組みにとらわれない製品を生み出しています。代表作には、手の動きを忠実に再現するVR用「ContactGlove」や、物理ボタンやホイールを一切排除した革新的な「Melt Mouse」があります。後者はクラウドファンディングサイト「Kickstarter」で公開され、3万7500円にもかかわらず1,200人以上から予約を獲得しました。今後も人とコンピューターがより密接に一体化する未来の実現を目指します。



分野・立場を超えた
対話をデザインする。
株式会社スカラコミュニケーションズ
株式会社ソーシャル・エックス
赤神青空さん



昨年に続き「KOCHI未来会議」へ参加しました。現在は自治体DXを担う企業でエンジニアとして働く傍ら、官民共創プラットフォームをつくっている会社にも所属しています。これまで物理学の専攻や学生団体での活動を通じ、異なる背景の人々をつなぐ「越境的コミュニケーション」を探究してきました。

分野・立場を超えた対話が新しい動きを生む事例として、学生と職員の交流や、原発地域の住民と商社社員の出会いを紹介。高知特有の「返杯」の精神は、多様な人をつなぐ鍵になると確信しています。未来を共にデザインする対話を、これからも呼びかけていきます。

笑うこと、楽しむことの
健康効果をお届けする。
アマチュア落語家 花の家こなつ
笑いヨガ講師 大野沙耶花さん



アマチュア落語家、および笑いヨガ講師として県内各地で活動しています。学生時代、関西大学で落語に出会い、人前で話す勇気を得た経験が、私のその後の人生を大きく変えました。現在は「笑いで心と体を元気に、人と人をつなぐ」ことを理念に掲げ、笑いヨガ講座や落語会の主催、介護・育児世代に寄り添う創作落語づくりなどに取り組んでいます。

出張講座では落語と笑いヨガを組み合わせ、高齢者の方々を中心に笑いの健康効果をお届けしています。活動を通じ、皆さまの人生をより笑顔あふれるものに変えていけたらと思っています。

リレ→トークからの パネルディスカッション

高知の未来を切り拓く若者たちのリレトーク後は、高知大学「学び創造センター」の谷口ちさ特任助教がモデレーターを務め、さらに深い議論へと誘いました。

今の時代だからこそ

「人とのつながり」を語ろう。

(司会) 高知大学キャリア開発ユニットの谷口です。ここからは4名の若い皆さんと一緒に進めていきます。先ほどのリレトークでは「対話」「越境」「自分らしさ」の根底には、「コミュニケーション」という共通点があると感じました。

大野「笑いには、人と人との心の距離が近づくという面があります。その点ではコミュニティの構築になりますし、初めての方同士が仲良くなるお手伝いをできているかなと思っています。」

浅野「僕の中では、人と仮想的な世界、あるいは電子的な世界とのコミュニケーションだと捉えています。人は言葉を介してコミュニケーションを図りますが、インターフェースの場合は身体感覚を伴います。自分自身を別の領域に置くことによって、電子的な世界の一部として溶け合い、一体化するような状態を意識しています。」

赤神「まずは越境したコミュニケーションをつくるために、視線をどう合わせるかが重要だと思います。コミュニケーションは目的ではなく、あくまで手段です。視線を対等にしたコミュニケーションを通じて、共通の目的に向かっていくことが大事だと思って活動しています。」

石崎「前回の中学生サミットでも、何を考えていいかわからないという生徒や、モヤモヤはあるけれど言葉にできないという参加者がいました。こうした『ある種の詰まり』こそが、コミュニケーションや対話においては大事なのではないかと感じています。」

(司会) 大野さんは何を実現したくて笑いヨガや落語をやっているんですか。

大野「大学時代、一人暮らしが心細かった経験から、みんなで笑って元気になる



左から谷口さん、石崎さん、赤神さん、浅野さん、大野さん

る場をつくりたいというのが原点です。落語会は、みんなで何かを見て一斉に笑うという非日常的な体験です。一人で家でテレビを見て笑うのもいいですが、みんなと一緒に笑うことで、その場を共有しながら元気になれるものです。

ただ、落語は演者側からの一方通行であり、人によって笑いのツボが違うため、必ずしも一斉に笑ってもらえるわけではありません。その点、笑いヨガはユーモアを介さないため、前提となる知識がなくても、大人から子どもまで笑いが伝播し、一緒に笑うことができます。」

(司会) 浅野さんは、「コンピューターと自分の世界」というと、ともすれば他者が介在しないデジタルなイメージを抱かれがちですが、その先に広がっていくコミュニケーションについてどのようにお考えですか。

浅野「僕がつくった『コンタクトグローブ』は、寝食を忘れてVRヘッドセットを被り続けているような人たちが買っていて、彼らはそこで友達をつくります。現実世界では人と関わらなかった人でも、VR内なら自分と話したいと思ってくれる人がたくさんいる。やがて一緒にご飯を食べたいという気持ちになれば、やはり手を動かし

たいじゃないですか。そういった場面でコンタクトグローブが使われていて、その先の『人との関わり』にもつながっていると思っています。」

リアルとバーチャル世界の 融合が進む。

(司会) 社会学的な観点からいうと、「弱い紐帯の強み」という言葉があります。キャリアにおいて、親や兄弟、親友といった「強い紐帯」の人よりも、実は「弱い紐帯」の人、つまり少し距離のあるつながりの人のほうが、有益な情報をもたらしてくれるという理論が1970年代から提唱されています。SNS上でゆるくつながっている人から声がかかるようなイメージです。社会学とキャリアを掛け合わせることで、新しいネットワークコミュニケーションが生まれる可能性を感じました。赤神さんは「返杯の文化」について、どのような感想をお持ちでしょうか。

赤神「私は社会課題を解決したいわけではなく、単純に興味本位で活動していると、その先にたまたま社会課題があったり、大学で協働する機会があったりいただけでした。その中で感じる『視線を合わ



モデレーター／高知大学「学び創造センター」
谷口ささ特任助教

せる』『他者を許容する』という姿勢は、まさに高知の文化そのものだったのだと改めて実感しています。返杯やおきやく、ひろめ市場もそうですね。隣席の人と自然に知り合い、しかもどこかで仕事のつながりができてくる。そういうところから、イノベーションが生まれたらいいなと思っています。」

石崎「先ほどインターフェースによって、リアルなコミュニケーションに近づけるといいう話がありました。一方で僕は、対面による身体性の関わりこそが大事だと大雑把に考えているところがあります(笑)。今後そうした技術が発展していくことで、訪れる未来は限りなく対面に近いものになるのでしょうか。」

浅野「現実世界にあってVRにない風習といえばスキンシップです。ピズやハグをするといった非本質的なこだわりをなくして、コミュニケーションを純粹にしたVR世界の方が関わりやすいと思う人たちもいるんじゃないかと思います。」

石崎「僕はその無駄こそが非常に大事だと思います。目の前に相手がいるからこそその緊張感があり、考えさせられるのではないのでしょうか。ただその反面、文化による制約やバックグラウンドを取り払い、関係性を再構築して人と関わり合いができるようになることに大きな可能性を感じました。」

高知だからこそその可能性は存在する。

(司会)リアルとバーチャル、どちらも大切ですよね。二項対立ではなく、それらをどう融合するかを考えることは、KOCHI未来会議のテーマに沿っていると思います。最後にご登壇の皆さんが目指している未来についてお聞かせください。

大野「大学時代は、一度高知を離れたか

らこそ地元の有難さを感じ、高知に何か貢献したいという思いで活動を始めました。先日、友達とけんかになった際のことです。私は『笑いの力で心も体も元気に、人と人をつなげる』というテーマを掲げているのですが、友人に『それっておこがましくない?』と言われたんです。

その時はショックでしたが、後で考えると、確かにそうだなと納得しました。自分がしたくてやっていることで、結果として相手が喜んでくれたらそれで十分なんですよね。無意識のうちに見返りを求めていることを、友達はたぶん伝えたかったんだろうと思います。」

(司会)見返りを求めることがあってもいいと思いますよ。それがないとやってられないときもありますから。

浅野「得たい情報がすぐに手に入り、友だちとも常にコミュニケーションできる。そんな時代においてスマホはもはや人間の体の一部になっていると感じます。現実空間が拡張されたような感覚です。私はこの拡張に近い現象を、どこかの分野で自ら興すことが目標です。それが倫理的に正しいかどうかを論じるよりも、拡大していく時代の方向性に自分の行動を重ねることができれば本望です。」

(司会)デバイス、インターフェースを使ってということですね。すぐく期待できますね。次は赤神さんお願いします。

赤神「一応エンジニアとしてウェブ開発にも携わっていますが、現在はエンジニアではない方も、AI技術を活用して『それっぽいもの』を次々とつくれる時代になっています。でもそれは本物ではないですね。本物を見つけるためには、コミュニケー

ションや、実際に手を動かすといったプロセスが重要になると思います。

かつて本を読み耽った時代があり、今ではインターネットを当たり前に使っているように、AIもいずれ人間の生活の一部となり、当たり前に入れられる時代が来るでしょう。私は、その新しい変化を「許容する力」を高知が持っていると感じています。坂本龍馬をはじめ、時代を切り拓いてきた先人たちが次々と生まれた高知が持っている、『許容する土壌と新しいことに立ち向かう力』をさらに磨いていけば、このまちはもっと面白くなると思っています。」

石崎「目指す未来は『人間が人間らしく生き生きと暮らす社会』と、これまでは漠然と構想していました。しかし、今回エンジニアやインターフェース関係のお話を伺い、非常に参考になりました。今後はどの部分を大切に、どこを変えていくべきかを見極め、新たな『人間らしさ』を構想します。そして誰もが生き生きと過ごせる世界をつくることを目指していきます。」

(司会)若い皆さんの思いや、これから実現したいことを伺うことができて、貴重な1時間でした。これからのキャリア開発で大切なことは、自分の軸を持って、それをきちんと発信して周りに伝えていくということです。たとえ意見が違っても構いません。その違いの中から、どうやって融合していくか。まさに「チームで何を成し遂げるか」という方向へ意識を移行させていく必要があるのではないかと思います。パネルディスカッションに登壇いただいた4名の皆さんに大きな拍手をお願いします。本日はありがとうございました。



未来妄想ト〰ク

横河電機・未来共創イニシアティブの大崎昇吾さん、乗附諒さんが進行し、「分かち合う場」として3人の妄想トークがはじまりました。



日本全国贋作ツアーへ

田村 敢さん

高知大学地域協働学部の田村敢と申します。現在、私は「日本全国贋作ツアー」という企画を構想しています。これは、美術品の贋作やレプリカを巡りながら、「本物とは何か」を問い直す旅です。

企画のきっかけは、高知県立美術館で贋作が発覚した出来事でした。この贋作騒動を単なる失敗や汚点とせず、人間らしさや「見る力」を育てる契機にできないかと考えました。AIが急速に発展し、オンラインと対面の価値が揺らぐ今、「本物と偽物」の境界もかつてないほど曖昧になっています。このツアーでは、参加者に「これは贋作だけれど、ここには魅力があるかもしれない」といった感覚や、答えの出ない「モヤモヤ」をあえて体験していただきたいのです。

大切なのは、誰かの判断に頼るのではなく、自分の目で見て、自分の頭で考える力を育むこと。そのためのきっかけとして、このツアーを実現したいと考えています。



誰もが来なくなる四国・最強スポット化

近藤 綾子さん

愛媛県松山市から参りました松山商工会議所の近藤と申します。私の祖父母が高知出身で、私自身も小学校時代を高知で過ごしたことがあり、この地には深いご縁を感じています。

今回のテーマ「妄想する未来」について、私は「誰もが来なくなる四国・最強スポット化」が実現できたら素敵だと思いました。四国は一つの島ですが、四県が連携して魅力を発信する機会はまだ少なく、それぞれ各県が自らの良さを打ち出すのが難しい面もあると感じています。しかし、本日高知の皆さんのお話を伺い、地域への愛着や自信が強く伝わってきて、四国全体にも共通する魅力、ポテンシャルがあると改めて実感しました。

現在、四県間の移動には時間がかかり、心理的には東京や大阪の方が近く感じられることもあります。だからこそ、そうした時間的・物理的な壁を越えて四国が一つになり、全国に誇れる地域として輝く未来を妄想しています。



高知県をキャリアの先進県へ

谷口 ちささん

私はキャリアコンサルタント資格を取得した12年ほど前から「高知をキャリア開発の先進県にしたい」という想いを抱き続けてきました。そしてその志を胸に、昨年ようやく高知へ帰郷しました。

高知は人口が少ないからこそ、一人ひとりの価値観に丁寧に向き合うキャリア開発が可能だと考えています。東京や埼玉で活動していた頃は、学校やクラスの規模の大きさゆえに児童・生徒への細やかなフォローが難しいと感じていました。母校の浦戸小学校は複式学級なのですが、キャリア開発の授業を行った際、その手応えから、やはり高知だからこそ実現できると確信しました。現在は市や県など自治体から人材定着に関する相談を受ける中で、根本的なキャリア開発の必要性を訴え続け、その必要性がようやく理解され始めたところです。

まだ妄想の段階ではありますが、高知から魅力的な人材を育て、輩出していく未来を形にしていきたいと考えています。





ワークショップ

刺激的な未来妄想トークの後、
全員で描く「高知のこれから」。
未来を語り尽くした熱い時間です。



ドイツへ子どもたちを使節団として派遣

1班

1班では、「子ども達の可能性」を妄想しました。「とさつ子タウン」は、地元企業の温かな支援のもと、14年にわたり続いてきた子どもたちのための職業体験プロジェクトです。ただの体験にとどまらず、市長選や議員選挙を通じて社会の仕組みを学び、自らの手で未来を切り拓く力を育む場でもあります。

この取り組みは、地域の大人たちも講師として関わり、子どもたちと共に学び合いながら、次世代の高知を担う人材を育てる循環を目指しています。実際に、現在のNPO委員長や事務局長はこのプロジェクトの卒業生。高知銀行で活躍する人材もここから羽ばたいています。私たちはモデルとなったドイツ・ミュンヘンへ、子どもたちを使節団として送り出す未来を想像しています。

今あるものを大事にする高知へ

2班

2班では、高知の発展の方向性として「維持(キープ)すること」に価値を見出すという意見が共有されました。未来に向けての発展という、規模の拡大や新しさを求めがちですが、高知の良さは今あるものを大切に保つことにあると考えました。関東から戻った方の体験談では、大人数の中の一人ではなく、少人数の中で自分の話をしっかり聞いてもらえる距離感の心地よさが語られました。また、海や土地の恵みによる豊かな食文化や、世代を超えたつながりの強さも高知の魅力として挙げられました。人口減少を前提に、その状況を活かしながら、地域のつながりや文化を深めていくことが、高知らしい発展の形だと考えています。



3班

今世も来世も幸せな高知へ

3班は「幸せな巡礼・高知墓地化」計画を妄想しました。人口減少によりすべての町を維持するのが難しい中で、地域ごとに役割を持たせるという発想から、高知の東部や山間部などに墓地を増やすという構想が生まれました。一見「死」に焦点を当てた逆行的なアイデアに思えますが、目指すは「今世も来世も幸せな高知」であり、目的は生と死を通じて高知を幸せな地にすることです。お墓を通じて人が訪れ、巡礼や観光が生まれ、地域に経済効果をもたらすという循環。よきこいが365日踊られ、訪れる人々が鎮魂と祝祭を同時に体験できる場である高知。墓地は終点ではなく、巡礼と交流の起点となるのです。

4班

タブーレスな組織づくりや社会の実現に

4班では、「タブーをテーマにした組織づくり」というユニークな妄想が語られました。高知には返杯のような独特な文化があり、地域ごとに異なる「タブー」が存在しています。そうしたタブーをあえて可視化し、組織の個性として活かすことで、より自由で風通しのよい関係性を築けるのではないかと考えました。また、地域に根を張る長老的な存在が変化を妨げることもあるため、柔軟に世代交代や役割の循環ができる仕組みも必要です。移住者としての視点から、異質な存在を受け入れる高知の寛容さを評価しつつ、それを活かしたタブーレスな組織や社会の実現を目指す妄想が共有されました。

5班

高齢者をさらに元気にするために

5班は「死から一定の距離がある未来」をテーマに妄想しました。高知では元気な高齢者が多く、すでにその未来が一部実現しているのではという気づきがありました。今後さらにその距離を広げるためには、「共助」の仕組みが重要だと考え、ハードとソフトの両面からアプローチする必要性が挙げられました。

ハード面では、過疎地域へのモビリティ支援やオンライン医療の導入が求められます。高齢者のIT活用には課題が残ります。ソフト面では、地域の祭りやコミュニティ活動を通じてつながりづくりが鍵になります。民間と行政の連携による制度の見直しも含め、フラットでオープンな高知だからこそ実現できる未来を描いています。

Message

5人からの 応援&ビデオメッセージ

第1回KOCHI未来会議に出席した若者たちから
高知の可能性をさらに見い出せるようにと、
熱きメッセージが届きました。



通信会社勤務 小川 優太さん

KOCHI未来会議の開催、心よりお祝い申し上げます。大学卒業後、現在、東京の通信会社で働いており、通信を軸に地方とつながる方法を模索しています。高知との関係が希薄になったと感じる中で、何らかの形で再びつながれるよう、さまざまな仕掛けを進めています。これらが芽吹き、花開く日を目指して邁進していきますので、いつか皆様にご報告できることを楽しみにしています。ローカルな高知から始まるこの会議が、世界に広がる風を起こすことを願っています。



高知市新エネルギー・環境政策課 綿谷 有紗さん

前回のKOCHI未来会議でのプレゼンやリレートークを通じて、高知への愛着を再確認しました。現在は高知市職員として、鏡川流域に関わる人を増やす関係人口創出に取り組んでいます。地域の方々との交流が原動力となっており、皆さんが自分の地域に誇りを持ち、安心して暮らし続けられるよう、今後も関心を持ち続けながら地域づくりに貢献していきたいです。



ハーバード大学4年生 矢座 孟之進さん

現在ボストンに滞在中のため、KOCHI未来会議に参加できず残念です。昨年のご招待いただきありがとうございます。高知で皆さんからいただいたエネルギーを力に、宣言通りこの1年で初の長編映画を完成させました。今は大学の図書館で日々勉強に励んでいます。いつかこの映画を高知で上映したいと願っています。今年のKOCHI未来会議の盛会と、皆さんのさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。



慶應義塾大学総合政策学部2年生 森 夕乃さん

昨年のKOCHI未来会議を機に、社会課題に向き合う難しさと面白さを実感しました。福井県出身として原子力やエネルギー政策に関心を持ち、大学では地域エネルギーや地層処分を研究中です。特に「安全」と「安心」、社会と科学の間のズレに注目し、11月にはエネルギー交流会の企画にも関わりました。今後も科学と社会をつなぐ視点を大切に、対話を通じてエネルギーの未来を共に考える場をつくっていききたいです。



株式会社Will Lab 小安 美和さん

昨年のリレートーク「尖った未来をつくる」では、多様な立場の方々との対話を通じて大きな刺激を受け、未来を自分たちでつくる力を実感しました。特に若い世代の言葉に影響を受け、現在は各地でジェンダーギャップ解消に取り組みつつ、若者との対話を重視しています。KOCHI未来会議で得た開かれた対話の空気を、地域を超えて実践していきたいです。今年の会議が新たなつながりと行動を生む場になることを願っています。



クロージング

高知、日本、そして世界の問題解決と、 未来の在り方を模索する会議となった。

2日間にわたるKOCHI未来会議は、昨日の午後3時に始まり、まだ丸一日も経っていないにもかかわらず、リレートーク、パネルディスカッション、そして妄想トークまで、まさにお腹いっぱいになるほど刺激的な議論が展開されました。冒頭でお示した「KOCHI未来会議が目指す世界」について、皆さんのお話を伺いながら、私自身も本会議が果たすべき役割や、描くべき未来像を改めて整理する貴重な機会となりました。

今回の議論には、いくつもの「二項対立」が潜んでいました。谷口先生が触れられた「計画と偶発」、広井先生、浅野さん、石崎さんが語られた「デジタルとアナログ」、そして「ポストデジタル」の先にある「生命」というテーマ。これらは単なる対立ではなく、その間に生まれる揺らぎや余白こそが、私たちの創造性を刺激するのだと強く感じました。

特に印象的だったのは「冗長性」というキーワードです。効率化が優先する社会では無駄と捉えられがちですが、石崎さんと浅野さんの議論にもあった通り、冗長性は偶発性を生み、知を豊かにするノイズとして機能します。文芸評論家・三宅香帆さんの「知識＝知りたいこと＋ノイズ」という定義は、まさにこの議論を象徴していました。情報が直線的に手に入る時代だからこそ、あえてノイズを含んだ知識の価値が高まっているのだと思います。

この2日間で提示された多くの対立軸やキーワードは、課題解



国立大学法人 高知大学
受田浩之学長

決に向かう高知、日本、そして世界が、どのように未来を形づくるべきかを考えるための重要なヒントでした。同時に、この会議自体が「冗長性を提供する場」であることの意義も再確認しました。計画的に未来を描きつつも、偶発性を楽しみ、そこから新たな価値を生み出す。そうした揺らぎを許容する場として、本会議はますます重要な役割を担っていくはずで

地域の中核大学として、そして交流の拠点として、私たちは今後とも着地点を決めすぎず、むしろ冗長性と計画的偶発性を楽しむ場として、この取り組みを継続したいと考えています。皆さまとともに、未来を語り、創り、そして楽しむ場を育てていくために、これからも努力を重ねてまいります。

最後に、この会議を支えてくれたスタッフの皆さんに心から感謝申し上げます。次世代地域創造センターの吉用副センター長、地域連携課の皆さん、そして多くの関係者の尽力によって、この2日間が実現しました。本当にありがとうございました。今後もネットワーキングを深めながら、KOCHI未来会議をともに育てていきましょう。

第2回 KOCHI 未来会議 スケジュール



11月22日(土)

- 15:00 開会あいさつ
- 15:05 第1回KOCHI未来会議概要報告
- 15:20 ビデオメッセージ
永野毅さん(東京海上日動火災保険株式会社相談役)
- 15:25 基調講演
「持続可能社会のデザイン—『デジタルの先』の未来と地域—」
京都大学名誉教授 広井良典さん
- 16:35 意見交換会—広井先生を囲んで—
広井良典さん(京都大学名誉教授)
柳原直人さん(株式会社たすきづな代表取締役)
玉木伸之さん(玉木アンドアソシエイツ株式会社代表取締役)
受田浩之さん(高知大学学長)
司会/堀見和道さん(高知大学理事)
- 17:35 1日目閉会



第2回KOCHI未来会議の
コーディネーター・全体司会
吉用武史次世代地域創造センター
副センター長



11月23日(日)

- 9:00 開会
- 9:05 GNT企業研究会活動報告
的場竜一研究会座長(高知大学人文社会科学部 准教授)
- 9:15 高知県本山町における活動報告
梶英樹さん(高知大学次世代地域創造センター地域コーディネーター〈嶺北地域〉)
- 9:25 リレートーク
赤神青空さん(株式会社スカラコミュニケーションズ)
浅野啓さん(Diver-X株式会社)
石崎悠也さん(京都大学2回生)
大野紗耶花さん(アマチュア落語家 花の家こなつ)
- 9:50 パネルディスカッション
<リレートーク登壇者>
ファシリテーター 谷口ちささん(高知大学 学び創造センター特任助教)
- 11:00 未来妄想トーク
- 11:20 ワークショップ
- 12:10 閉会



第2回 KOCHI未来会議

発行/国立大学法人 高知大学 次世代地域創造センター
編集人/次世代地域創造センター副センター長 吉用武史
高知市朝倉本町2丁目17-47

<https://www.kochi-u.ac.jp/cersi/>

